

● 第8回 武蔵野市国際 オルガンコンクール

宮 沢 昭 男

武蔵野市国際オルガンコンクールが第8回目を迎え、2017年9月6日～18日の日程で開催された。1988年第1回から4年に1回、今回5年ぶりの開催である。

結果は次のとおり。

- ・第1位アマンダ・モール（米国、1986年生まれ）。
- ・第2位トーマス・エドウィン・ゲイナー（ニュージーランド）。
- ・第3位カテリーン・エマーソン（米国、1992年生まれ）。
- ・第4位千田寧子（日本、東京芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程在学中）。聴衆賞も。
- ・第5位木村理佐（日本、ドイツ国立リュベック音楽大学在籍）。

今回は世界16ヶ国から57名の応募があった。次の3名がオーディション委員として審査にあたり、出場者を15名に絞った。小林英之（委員長・日本）、ユルゲン・エッスル（ドイツ）、ファッサン・ラスロ（ハンガリー）。

出場者15名は、米国3名、日本、韓国、リトアニア、ハンガリー各2名、ニュージーランド、ロシア、カナダ、ポーランド各1名。

第1次予選：9月9日、10日。

演奏曲目：J.S.バッハ「前奏曲とフーガ」ニ長調BWV532、またはホ長調BWV566。マックス・レーガー「オルガンのための9つの作品」Op.129より1、3、6。ジャン・アラン「クレマン・ジャスカンの主題による変奏曲」AWV99。

第2次予選：13日、14日。

演奏曲目：ゲオルク・ムッフアト「音楽とオルガンの資料」よりトッカータ7番。ヴィンツェント・リュベック「主よ、われなんじを呼ぶ」、またはニコラウス・ブルーンズ「来ませ、異邦人の救い主よ」。J.S.バッハ「クラヴィア練習曲集第3部」よりBWV682、BWV686、BWV688。

予選はブラインド審査、本選9月17日に進んだ先の受賞者5名は、自由選曲のリサイタル形式で審査に臨んだ。持ち時間は、出入り、曲間も含め40分以上50分以内の休憩なし。ただし今回の本選演目には、1960年以降に生まれた作曲家オリジナルのオルガン曲（10分以内）を1曲含むことが条件に付された。ここに一つの特徴がある。当コンクールが世界のオルガン曲の流れに与することに繋り、意義は大きい。新たな感性がオルガン界に芽吹くだろう。

審査委員は7名。ギ・ボヴェ（スイス、審査委員長）、ハンス・オラ・エリクソン（スウェーデン/カナダ）、フランソワ・エスピナス（フランス）、ベルンハルト・ハース（ドイツ）、廣江理枝（日本）、シン・ドンイル（韓国）、デイヴィッド・ティッターリントン（英国）。

1960年以降生まれの作曲家オリジナル曲という本選プログラムの条件により、出場者15名が計9人の作曲者を上げた。60年代生まれ4人、70年代3人、80年代2人。最も若いグリウシユ・プシビルスキは1984年生まれだ。実験的なポーランド作曲家だ

けに、掲げてきた同国出場者が本選に残れず惜しまれる。

本選に挑んだ5名は、それぞれが異なる60年代以降の作曲者をあげたので、5人5曲の新たな地平が開かれた。この点、3位のエマーソンが取り上げたティエリー・エスカシュ「エヴォカシオンⅢ」が輝きを示した。彼女はメシアンも取り上げ現代的な感性を持ち味とする選曲の妙にも長けた、シャープで華麗な演奏とリズム感のあるオルガニストである。

1位のモールは、いずれの時代作品にも熟れた演奏の才を持つ。バッハを弾いても作品に埋没せず、躍動感を引き出し聴き手を新たな世界に導くなど、オルガン曲の楽しみを熟知する。エンターテインメントの要素をオルガン音楽に付与する才を持つ。モールは、5人の中では最も若い81年生まれのニコ・ムーリー作品を取り上げた。ただモールもエマーソンと同じメシアン作品を取り上げたものの、60年代以降の作曲者の課題も含め、その点では今一步。芸術音楽の現代的感性については、今後の課題に思われた。

いずれにしてもこの2人が米国オルガニストの現況を示唆しているのかもしれない。米国気質が今後どのような刷新をオルガン界に生み出すか、一つのポイントになるだろう。

2位ゲイナーは、音楽の作りが骨太い。もちろん重量感だけでなく、巧みなリズムも利かせて多面的な表現力で魅せた。

千田、木村がともに3曲のうちバッハ、ロイプケと同じ作曲家、しかもロイプケについては同一作品になったのは偶然とはいえ、日本のオルガン音楽の主導者層に多様性の欠如はなかったらどうか。オルガン界にあって開拓精神とは何かを考えさせられた。

それは演奏にもうかがえた。5年前このコンクールで1位を得た福本茉莉が同じロイプケで豪快な演奏を聴かせたことを考えるなら、選曲、演奏で斬新なものを期待したかった。

当コンクールは新しい風が求められている。2008年第6回が27カ国152名、2012年第7回は21カ国95名の応募者、そして今回。回を重ねるごとに規模が縮小している。武蔵野市から3000万円の費用負担で運営されているものの、オルガン関係者自身がオルガンの魅力を、より積極的に市民に伝える努力なしには、財政事情の厳しいおり、市民から支持は困難になるだろう。

新たなホールは今も建て続けられ、そこにはオルガンも併設されることが多い。いかなる可能性が開けるか、大都市の自治体行政がなぜオルガン文化を支援し続けるか。まず大学などの高等教育機関でオルガンに携わる方々がタコソボ化を避け、叡智と進取の気性を追究するよう期待したい。